

## ラブ・アクチュアリー

仲程愛美

奨励者紹介[なかほど・まなみ]

同志社大学キリスト教文化センターチャプレン

日本キリスト教団石橋教会牧師

あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたも同じようにしなさい。これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。また、キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです。いつも感謝していなさい。  
(コロサイの信徒への手紙 3 章 12-15 節)

季節が秋から冬へと移り変わり始めると、街の装いも一気にクリスマスのデコレーションに様変わりしていきます。キリスト教の暦、カレンダーではクリスマスを待つ期間であるアドヴェントは 12 月からです。なのですが、世間の方が一足早く煌びやかさを放ち、クリスマスの訪れを知らせます。豪華な様相や商業的なイベント感覚でクリスマスを過ごす世の中に、何とも言えない思いを抱くこともあります。本当のクリスマスをどれだけの人が知っているだろうか。それでもやはりクリスマスの喜び、幼い頃に抱いた高揚感、なんだかワクワクする気持ちは忘れられないものです。毎年必ず訪れるこの時期だからこそ、改めてクリスマスの意味について少し考えたいと思うのです。

突然ですが、2004 年に公開された『ラブ・アクチュアリー』という映画をご存知でしょうか。先日、映画の日本公開 20 周年を記念して、デジタルリマスター版の全国公開がなされることを知りました。クリスマスに観たくなる映画の定番として数えられるようになり、年月が経ったのだと懐かしく感じました。

この映画は、ロンドンを舞台にクリスマスを迎えるまでの 5 週間を 19 人の登場人物たちが織りなす、さまざまなドラマによって展開していきます。そこにはたくさんの「愛」のかたちが表されています。単なる恋愛映画ではなく、登場人物たちは葛藤や上手くいかない現実にもがきながら、大切な誰かを想い奮闘する姿は魅力的で、観る年齢や立場によって感情移入してしまうキャラクターが変わります。

個人的に印象に残っているのは、親友のパートナー(彼女)に片思いをしていた人物が、その胸の内を伝える場面です。その方法が何とも切ないのですが、思いを綴った画用紙をめくりながら、紙芝居風の告白を遂げるのです。人知れず彼女だけに伝えたのは、見返りを求める訳ではなく「君は最高」だと、ただただ「愛」を伝えるだけのシーンは得も言われぬものでした。

愛を伝えること、それはとてもエネルギーのいることです。勇気が必要な場合もあります。自分の一部をその感情をめぐり出す作業だと言えるかもしれません。しかも、伝える「愛」とは確かなかたち

があるものでもなければ、目に見えるものでもありません。愛の種類はさまざまです。捉え難いのが愛であり、だからこそ人は振り回されたり、一喜一憂したりと、「愛」について悩むのです。映画に出てくる人物たちも人間味溢れる姿で、それぞれの愛のかたちと向かい合っています。観る者は、そうした人生のさまざまな愛のある風景、物語に、自分の経験や体験を重ね、時に心が切なくもなり、温かくもなるのです。

映画の題名『ラブ・アクチュアリー』を直訳すると、「愛、実際のところ」となります。これは劇中の次の台詞がもとになっているようです。

「愛はどこにでもある。崇高なものではない。見渡すと実際のところ、愛はあなたの周りに溢れている」。

愛は実際のところ、あなたの周りに溢れている。この言葉が意味するのは、私たちは愛のただ中に生きている、ということなのではないでしょうか。そこに気づくのは、簡単なようで意外と難しい。崇高なものではないにも関わらず、特別視してみたり、幻想を抱いたりしてしまい、見渡す限りに溢れているそれに気づくことができない。改めてそんなことを考えさせられるのです。

先ほど一緒に分かち合いました聖書の言葉は、手紙のⅠ部分にあたります。この手紙は、キリスト教に出会った者、イエスを救い主だと信じた人々が集う共同体に送られた手紙です。クリスチャン(キリスト者)として、どのような心持ちでいることが重要かを説いたものです。今から 2000 年近くも前に書かれたものなのですが、そこには現代にも通ずる人々の有り様、人間関係の根本が述べられています。「憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着け」「互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合」うようにと手紙の著者は勧めます。相手を思いやり、お互いの欠点を突き合う関係ではなく、助け合える関係。きっと古代社会においても、それらは実現困難だったのでしょう。もし、そうした関係が共同体の中で築かれていたのであれば、敢えて手紙に記す必要はないのです。出来ていることを、わざわざいう必要はないからです。しかし書き残されているところを見ると、時代は変われども人間の本質は変わっていないのだと気付かされます。

手紙の著者は、人間関係の難しさを十分理解しつつも、その先を提示していきます。「これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。」と。この「すべてを完成させるきずな」という表現には、愛の普遍性を語りながら、愛が見えないものとしての存在する「きずな」であることをはっきりと示しています。人はこの愛というきずなに支えられ、他者を思いやることも、認め合うことも、互いに赦し合うことも可能になる。そこには見えないけれども確実に存在する愛によって成り立つ、人間関係の極みがあります。だからこそ、愛を身に着けることが重要であり、すべてに加えられるべきものになるのです。

最後にⅠ冊の絵本をご紹介します。日本で 1980 年に出版された「愛はどんな色かしら?」(ジョーン・ウォルシュ・アンブランド著 立原えりか創訳『愛はどんな色かしら』主婦の友社 1980 年)。というものです。原書は 1966 年にアメリカの詩人、児童書作家、イラストレーターであるジョーン・ウォルシュ・アンブランドの『WHAT COOL IS LOVE?』です。柔らかいタッチのイラストを背景に、語りかけるような短い言葉が綴られています。「りんごは赤 太陽は黄色 空は青 この葉は緑 大地は茶色」とそれぞれが唯一無二の色を持ち、その存在を証明しています。色は世界を美しく彩るために重要ですが、それ以上に私たちが何を感じ、考え、行うのかも重要な事柄です。色は見えている部分としての外側であり、同時に内面で感じるができる内側でもある。だからそこ

そ、この絵本は目で見ることのできない「愛」の色について問いかけ、締めくくります。

私たちは、愛がどのような色かについて明確な答えを出すのは難しいでしょう。模範解答がある訳でもありません。一人ひとりに答えが委ねられています。

キリスト教では、神の愛のかたちの1つとして、イエスを語ります。神からの贈り物、神の愛が見えるかたちで表されたのがイエス・キリストだと。そのイエスの誕生を記念して祝うのがクリスマスです。クリスマスの時期になると「誰か」を思い、「誰か」のために時間や労力をさく…そんな雰囲気が街を包みます。プレゼントを贈り合うのも、その1つと言えるかもしれません。クリスマスは実のところ、「愛」を見つめなおす時、「愛」に気づく時、ではないでしょうか。「愛はどこにでもある。崇高なものではない。見渡すと実際のところ、愛はあなたの周りに溢れてる」のだと、1年に1度、ちょっと立ち止まって、確認するひとときであればと願います。

そしてこの作業は、家族や友人と言った身近にいる大切な人と間に限定されるものではありません。むしろ見渡した時に「私」の周りにいる人々、とりわけ寂しさや不安、悲しみや痛みを抱えている人々こそ、世界に溢れている「愛」を分かち合えるひとときであってほしいと思います。煌びやかで、明るい、楽しいだけではない、本当の意味での「ラブ・アクチュアリー（愛、実際のところ）」に気づいてみてはいかがでしょうか。